

《巻頭言》

本学の“知の創造”について ～オレンジジュースで煮る鶏肉～

副学長（研究）
高橋 隆行

本冊子は、本学が平成21年度中に創造した“新たな知”をまとめたものである。いうまでもなく、大学の本分は“新たな知の創造”にあり、大学教育はその最先端の知に裏付けされたものでなければならない。多くの大学が、このような冊子を継続的に作ることで、知の創造に関する報告を行っているが、来年度からは全国の国公私立大学でインターネット上での情報公開が義務付けられることから、この冊子の発行は本年度が最後になるかも知れない。いずれにしても、外部の目に大学の活動を公開してご批判をいただくことは、ややもすると研究者が陥りやすい“独善的”なスパイラルを未然に防止し、税金の効果的な使用を納税者の皆様がチェックする効果的な方法のひとつである。その意味でも、この冊子をご覧になってお気づきのことがあれば、是非ご意見をお寄せいただきたい。

さて本学では長らく、複数の研究者が協力してひとつの研究プロジェクトを実施することがきわめて少なかった。この反省を元に、2004年の大学改組の際に、異学部同分野の研究者を学系という組織にまとめるとともに、学系内でのプロジェクト研究を奨励してここまで来た。この学系組織の課題については、星野前副学長が前号の巻頭言において述べているが、ポジティブな成果としては、組織的な研究を一定程度作り出したという点で、当初の目的の一部は実現しているといえる。しかし、この組織形態がある意味で停滞し、新たな再構築を迫られているのもまた事実である。

一方、本年度より“マトリクス”という概念を新たに導入し、学系をまたぐいわば学際的な研究プロジェクトをも奨励するようになった。マトリクスとは、学系とは別に、地域づくり、医療・健康・福祉、国際化、環境・循環、文化論、産業振興という新たなキーワードを設定し、これらのキーワードを縦糸に、学系を横糸として研究者間の相互交流をより促進しようとする試みである。このマトリクスは導入して間もないため、その評価を早計に下すべきタイミングではないかもしれないが、残念ながら少なくとも定着する方向に進んでいるとは言えないように見える。

これらの試みが目指したものは、結局のところは研究者間の交流である。両者の間には分野の遠近の違いがあるだけで、その意味では、改組の際に目指したプロジェクト研究の奨励という方向性をいずれも踏襲するものである。そして、分野の遠近の違いがそのまま受け入れられ方の強弱に反映してしまっているように思われる。

ところで、研究年報の巻頭言としては卑近な例で恐縮であるが、諸賢は、オレンジジュースで鶏肉を煮ると大変やわらかく美味になることをご存知であろうか。また、信じられないほどの大量のマスタードを入れて長時間煮込むと、幼稚園児が食してもおいしいハンバーグ用のブラウンソースができあがるのをご存知であろうか。いずれも、小職のオリジナルではないが、教えられて過去に自ら試したことがあるものである。料理の専門家や食通の方を除いて、おそらくほとんどの方はこの組み合わせに驚かれるのではないだろうか。ここで重要なのは、このような“意外な”組み合わせは、試行錯誤ではたぶん出てこないということである。そこには、豊富な経験や知識に基づいた専門家たる料理

人の精緻な発想があっはじめて斬新な組み合わせが新しい味を生むのである。

本学の学系ならびにマトリクスが抱える問題のひとつは、この料理人の不足によるもののように小職には感じられる。あるいは、手元にある材料を用いて新しい知見に導くような、storyteller の不足と言い換えてもよい。自分の専門の枠をはみ出して、少し別のところから新しいストーリーを描ける研究者こそが、本学に求められているものである。もちろん、大学の知の創造には、新しい美味な鶏肉を作る、という方向性もあるであろうが、これまでの本学の取り組みは、明らかに storyteller の出現を期待したものになっている。

学系組織に期待されるもうひとつの大学運営上の側面は、人事上の効率性であろう。つまり、複数の学類で重複するような専門性を持つ研究者を必要最小限の数に集約し、できる限り少ない研究者数で広い分野をカバーしようとする方向性である。本学のような小規模大学においては、このような方向性は理論的には是であろうが、少なくとも内向きの利害調整に明け暮れている限り、その実現は極めて困難である。いずれにしても、この課題は多分に政治的であり、本稿には相応しくないとと思われるので、このあたりにしたい。

さて近年では、特に本学のような地方大学においては、創造された知を地域のために効果的に使うことに対しても大きな期待が寄せられており、このような、いわゆる地域貢献活動の重要性はますます高まっている。それゆえ大学人は多忙化しているという不満も聞こえてくる。しかし、このような活動を敢えて研究活動とわけて考える必要があるであろうか。新たに自ら、あるいはどこかで創造された知を“効果的に利用する方法”も新たな知であり、与えられた材料をどのように料理するかは、まさに storyteller としての資質次第である。

大学をめぐる情勢はめまぐるしく変化しており、常に新しいストーリーを産み出す研究者集団でありたい。